
受難

飛海 ガクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受難

【Nコード】

N5227J

【作者名】

飛海 ガクト

【あらすじ】

ジタンが告白しようとする、いつもバッツはするりと逃げていつてしまう。一体何故!? これは、神が邪魔していると思えない――。

デイスディアファイナルファンタジーのジタン×バッツ、ラブコメ長編です。

第一の受難（前書き）

若干セシゴル味があります。（寧ろセシ↓ゴル）

第一の受難

「バツツ、こっちこっち！」

「ま……待てよ、ジタン！」

バツツの名を呼びながら、ジタンはさつと駆けて行く。

月の溪谷は走り辛く、旅人ではあるが旅人でしかないバツツは盗賊のジタンにはついて行けない。

ハアハアと息を切らせながら昇り切ると、其処でジタンは呆然と立っていた。

「ど、どうしたんだよ、ジタン……？」

そんな所で止まってるなよ、とバツツは軽く悪態をつく。

実際、其処で待っているとは知らず、ぶつかってしまったのだった。

しかしそんな衝撃と悪態も耳には入らなかったのか、ジタンは一向に動く気配を見せない。

「ジタン……？」

「バツツ……あれ、見ろよ」

「ん……？ あ、綺麗な月だな」

「そっちじゃなくて！」

向こう、とジタンは月の下の方を指さす。

満月、大地、魔道船……と見ていって、ピタ、とバツツの視線が止まった。

「セシル……と、ゴルベーザ！？」

「待てって、バツツ！ ……戦ってるわけじゃ、なさそうだ」

「え？」

ジタンの言葉に、動きかけたバツツの足は止まる。

……確かに、小さく見えるセシルとゴルベーザは、争っている様子ではなかった。

というか、セシルが一方的にゴルベーザに寄って行っている様に

見える。

「何の図だ……？」

「——あ」

バッツは目を凝らして良く見ようとするが、やはり詳しくは見えない。

しかしジタンは、何か見えたようだ。

一言発したつきり、もう何も言わなくなってしまったが。

「ジタン？」

「……行こう、バッツ。こんな所に居ちゃいけない」

「へ？ でも、話が有るって……」

「話はまた今度！」

ジタンは、バッツの手を引いた。

わ、と驚きの言葉を発する余裕もなく、バッツはジタンと共に地面に降りる。

「ジタン……？ 何なんだよ……？」

「後でっ」

それ以上の説明はしようとはせず、ジタンはバッツの手を引いて走る。

……また、息が切れるまで。

セシルとゴルベーザの姿が、それこそ豆粒以上、全く見えなくなるまで。

其処まで走って、漸くジタンは、手を放した。

「は……っ、ジタ、も、無理……っ！」

バッツが息も絶え絶えに、そう言うときジタンも止まる。

ジタンも地面に座り込み、十数秒、荒い呼吸の音以外は何も聞こえなかった。

「——で——何で、逃げたんだよ？」

「え……いや、あはは……」

じとりというバッツの怪しむ様な視線に、ジタンは隠す様に笑う。

——彼らが何をしていたのかなど、言えるわけがなかった。

セシルがゴルベージに、キスを迫っている様にしか見えなかったのだから。

「気にしない気にしない……話はまた今度で良いだろ？」

「え？ いや……俺は良いけど。ジタンが言い出した事だろ？」

「あ……うん、まあ。ちよつと今日は……何か、言える様な感じじゃないし」

あはは、とまた濁す様な笑い。しかしバツツは追及しない。

ジタンが良いならまあ良いか、と笑った。

「——今度。今度こそっ」

「ん？」

次こそは、絶対に言ってやる！ と。

ジタンはバツツに聞こえない程の声で呟いた。

第一の受難（後書き）

ジタンの想いが報われる日は来るのでしょうか。
いや……来るんですけど（笑）

手前の受難（前書き）

受難っぽくない感じですが、やっぱり受難です。
バツはKYなくらいが丁度良いのかもしれない。

手前の受難

「変な話さ、俺が言わなくても、バツツから言ってくれば良いわけだよな。……なあ、バツツ？」

「んー？」

ジタンが言うと、バツツは間延びした声で返しながらやって来る。どうやらスコールとの話は終わったらしかった。

「今暇？」

「暇だけど……」

「じゃあ俺と一緒にデート行こう！ デート！！」

「デ……デート！？」

ジタンはデートと喜びながら、バツツの腕に自身のそれを絡める。驚いているのはバツツである。こういう事初めてなのかな、とチラとジタンは視線を上に向けた。

「でも、ジタン……」

「んん？ バツツは俺の事が嫌い？ 俺、バツツの事大好きなんだけどなー」

「え……え？」

困惑。それと照れた様に真っ赤な頬。

うわ、可愛い、と思ったジタンは、くすと笑う。

「……こういう事、初めて？」

「……っ、当たり前だろ！」

「バツツって奥手そうだもんさ。俺と似てるのかと思ったら、全然違うところあるし」

「……何なんだよ、もう」

「ものまね出来るのにさ、勿体ないな、と思ってさ」
ものまねならば奥手も直ぐに解消されるんじゃないのかなとジタンは思っていた。

それともそれは性格までは真似出来ないものか。

しかしバッツは繊細だもんな、とジタンは笑った。

「じゃあ、行こうか、デート」

「いや、でも、デートって……」

「駄目か？　じゃあ、この間の話の続き」

ジタンがそう言うと、バッツの表情に少し揺らぎが見える。

『デート』は断ろうとしていたのに、『話の続き』と言うところなるか。ジタンは少し嫉妬を覚える。

「とっても大切な事なんだし、2人きりで話したいなあ」

「あー……あー、分かった。じゃあ行こう、ジタン」

「やった！　バッツ、何処が良い？」

「ええ、別に、何処でも……」

何処でも基本は戦場である。

いつの間にかリーダーと化しているウォーリアオブライイトからは、遠くへ行くなら2人1組で行動するように、と言われていた。

なのでジタンとバッツ、2人はそんなに弱くもないので、基本的には何処まででも行ける事になる。

「じゃあ——あー、月の渓谷は駄目だな」

「何で？」

「……いや、別に」

前回の事を思い出し、ジタンは即候補地から『月の渓谷』を外した。

またセシルとゴルベージが居るとも限らない。

「うん、別に場所決めないで、そこら辺歩こう。これじゃデートにならないけどな」

「この辺りで良いのか？　誰かに聞かれたらマズイ話なんじゃ——」

「大丈夫大丈夫。きっと誰も聞いてないし、」

——遠くまで行くと、心配されるしな。

誰が心配するのは分からなかったが、ジタンはバッツの腕を取ったまま、歩く様促した。

手前の受難（後書き）

ジタンの想いよ報われろ！

番外編：バッツの受難（前書き）

ジタンの受難ではなく、バッツの受難です。

でもやっぱり、最終的にはジタ↓バツなんだろうなあ。

番外編なので本編とはあまり関係ない感じです。

番外編：バッツの受難

本物のクリスタルの輝きは、一点の汚れもなかった。

これが、と思わせる様な、そんな神々しい輝きを魅せていた。

今あのクリスタルを思えば、どうしてあんな見せ掛けの光に騙されてしまったんだろう、と思う程の。

そして、騙された俺に、どうしてクリスタルは輝いたんだろう。

「バッツ、どうした？ 何かさっきから、元氣ないけど……」

「え、あ……何でもないよ、ジタン」

ジタンの目にもそう映っていたのか、と俺は思う。

「そうか、何でもないのなら良いが」

と、スコールまでそう言い出した時には、俺は流石に一言も言えなくて。

多分、口を開けたまま数秒間、俺は静止していたと思う。

「……？ どうした、バッツ」

「いや、あははは……」

まさか、スコールがそう言ったのに驚いた、と言えるわけもなく。

俺は苦笑いでごまかした。

「ま、でも……何でもないんなら良かったよな、スコール」

「そうだな」

…… 最近のスコールは、良く喋る。

それが何故なのか、何かの予兆なのか、分からないけれど。しかしスコールが喋る事は、俺にとっても嬉しい事だった。

「…… 2人とも、心配してくれてたのか？」

気付いた事。…… 2人の眼差しは、あまりにも温かくて。

確信してしまえば、涙が出そうになってしまう程の。

「当たり前だろ？ 仲間なんだからさ！」

『仲間』、という単語を何の躊躇いもなく発したジタン。
嬉しい筈なのに…… 筈なのに、何故か俺の心は喜んでる様では
ない。

ちくりと胸が痛む様な、言い知れぬ感情を覚えた。

「……有難う、ジタン、スコール」

「……礼を言われる程ではない」

「どういたしまして、バツツ」

対称的な反応を返す2人に、俺は苦笑を禁じ得ない。

……笑っちゃう。2人一緒なら元気になれるよ。有難う。

俺は言わなかったけれど、そう思った。

番外編：バツツの受難（後書き）

バツツもたまにこういう事思ったりするのかな。

番外編：嘘つきの受難（前書き）

シリアスです。コメディーないな。
やっぱりジタ↓バツって感じですね。

番外編：嘘つきの受難

「……お前って嘘つけなさそうだよな、バツツ」

「ん……？ 何でそんな事聞くんだよ」

「ジタン、と優しい瞳で笑うのはバツツ。」

「人生ってな……嘘つく事も、必要なんだよ」

突然そんな事を言い出したジタンに、バツツは一瞬呆けた様な表情をする。

だが、次の瞬間には、ぶつと吹き出して。

「何だよ、いきなり……ジタンらしくない」

「な、何で笑うんだよ！ 俺は、バツツの為を思って——」

「だって、此処に居る限り、嘘つく必要なんてないだろ？」

皆大切だからな、とバツツは言った。

その笑顔は、……あまりにも綺麗過ぎて。

ジタンは言葉を詰まらせる。

「……ああ。そうだな」

表情が一瞬だけ憂いに沈んだ。

「俺が……俺が、」

「え？」

「……いや……何でも、ない」

俺が代わりに嘘をついて、バツツを護るからさ。

だったら笑っててくれるだろ……なんて。

「……十分幸せだって、教えてくれたばっかなのにな」

何言ってるんだろ、とジタンは自嘲気味に笑った。

番外編：嘘つきの受難（後書き）

『ライオンゲーム』を読んだ直後でした。
バツは知らない内に皆に護られてそうですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5227j/>

受難

2010年10月9日07時56分発行